

## 戒めの石

霞ヶ城公園の東端、武士が城内に出入りする際に通った門の跡地には、高さ 8 メートルの石が立っています。石には 4 行の詩が刻まれています。

爾俸爾禄

民膏民脂

下民易虐

上天難欺

二本松の民を大切にせよという藩士に対するこの戒めの言葉は、1749 年に二本松藩五代藩主丹羽高寛の命により石に刻まれました。高寛は藩の統治を正し、改善する方法について助言を求めるために儒学者の岩井田昨非を雇った改革志向の統治者であり、この石は昨非の提案の一つでした。当時のこの道は今の道路よりも低い位置にあったため、ここを通り過ぎる藩の役人にとっては頭上にそびえ立つこの石は今よりさらに存在感がありました。

この詩句は、10 世紀中国の後蜀王朝最後の皇帝、孟昶によって建てられた同様の石碑にある長い詩から抜粋されたものです。孟昶の示した模範は、その後何世紀にもわたって中国

全土に数多くの石碑が建てられるきっかけとなったことを、昨非は知っていたのでしょう。

記録によれば、この石は本来の目的を果たし、藩の武士が人々に一層の勤勉さと敬意を示すよう促したそうです。しかし、やがて二本松の農民たちの間で、この詩を逆から読むと、人々にもっと働かせ、持てるものを全て奪い取ろうという意図が込められているという噂が広まりました。1749年の収穫は不作で、二本松藩ではやがて本格的な農民の一揆が起こりました。記録によると、昨非は自ら反乱者たちに話しに行き、碑文の真の意図を見事に説明したため、多くの人が涙を流し、反乱の終結を求めたそうです。